

⑤

これらは、自他平等の仏教思想を理念とし、現世安穩後世安樂を願って、故郷を遠くはなれた阪神の地へ交易におもむき、多額の金品を投じて、海上はるばると購入したものと思われる。当時九州では御影石は、一般庶民にとつては高級品であり、高嶺の花であった。そんな時代であった。

既、鹽や畑のすみへこは、無羅作に積み上げられた墓石の中にも、五輪塔婆らしい姿をした古塔が、ちよこざんと頭を出している。よそではあまり見かけない格好の石造品が多い。交易が盛んであった畑の浦の歴史がしのばれる。

後日また再訪、あらためて調査したいものである。  
(おわり)

研究

直川村竹ノ下の供養塔

「大乗妙典一石一字漸写塔」について

会員・直川文化財調査委員 休石 博 美

○ 開書 供養塔物語

伝えられる物語りに、昔祖柱蔵司という人あり。若き日何の因縁か悪の道に入り、親は涙をもへて説諭すれども空しく風、愛の鞭も効き目なく、親の心をかえり見ず、悪業は益々深まるばかり、ついに捕われの身となつた。

数年の後放免となり、人の心は善なるものか、父恋し母恋しやと帰って見れば両親はすでに此の世の人でなく、斬は傾き壁は落ち、屋敷のまわりは草叢となり、ただ茫然と涙にくれて立ちつくすのみであった。

や、あつて氣をとりなおし、今は亡き両親におわびすることと思ひ立ち、両親の追善供養こそ親不孝のつづきいと心なきめ、お城下の養賢寺の門をたいてさんげし又仏の弟子となり、念仏三昧仏道に精進の日々を送ることとなった。いくばくもなく修業も進み、ここ上直見村竹の下鬼越(おんろき)の庵寺に住むこととなり、ここで終生を過ごしたという。

その晩年、父、一空常実信士、母、理陽妙智信女の菩提を弔つて、程近い丘のほとりに供養塔を建てることとし、身ときよめ、香をたきつつ法華経をとよめながら、一石一字の漸写をなしとげ、願成寺第四世仁愛和尚にその銘文をお願ひ申したと伝えている。この庵主がはじめに書いた祖柱蔵司その人である。

歲月は流れて二百七十年、今尚、桃石山の麓近く、樹林のうすぐらい所に、この供養塔は静かに建っている。そして鬼越の庵寺趾には建物こそなければ、墓石も空篋印塔などが、おびしく散らばつて残っている。

○ 採録 供養塔銘文

(所在地 直川村上直見竹の下焼石)

大乗妙典一石一字漸寫

經謂大乗妙典者經中王也 誠哉  
一切衆生開式句一偈 成佛  
人而朝宗之時 悉皆無不作佛善  
千  
祿聖之後州海部郡佐伯莊龍鼎山養  
賢派下之祖柱蔵司 柚丹悃為有父



一空常寂居士 亡母理陽妙智信女書寫於一石一字之妙  
法蓮華經 自元祿癸未之秋至空永開元之冬 而功既成  
矣 嗟乎其至孝不可枚 是就 諸銘敢石傳 卒應  
其需云銘

經王功九妙難思 恒沙 喻亦豈願 一石一字便黃泉  
三乘三國出火圖 歷 劫退煩悩魔 渡苦海為菩提船  
兒戲猶成仏生天 况是書寫須冥各

宝永元歲次甲申冬十一月念十暮

本正山願成禪寺小比丘 仁叟宗恐謹

(供養塔の大きさ)

高さ 三尺六寸五分(一一〇cm)  
中 一尺八寸五分(五六cm)

○願成寺 龍淵堅道師の御教示

供養塔銘文を誌された仁叟和尚について伺います  
したところ、次のようなご教示をいただきました。  
失礼ながら全文とかがけて会員の参考に供します。

冠省  
御承照の件

仁叟和尚は当山中興の祖で四世、秋田県の長松寺の  
御出身で、老耄当山の後住を拙山和尚に譲り、ご自  
分は養老山万休院を創建(現存)せられて隠退なさ  
った方です。現在万休院に當時の毛利公より、「仁叟  
叟和尚の隠れ家は云々」という軸物が残っておりま  
す。

碑銘を拝見しますと、当地養賢寺のお弟子さんで、  
祖柱蔵司(そちゆうざうす)という方が、ご両親のお供  
養に、法華経を一つの石に一家づつ書いてお供養し  
た塔の銘で、御承示の一空常信士、理陽妙智信女の

お二人は、その祖柱蔵司のご両親と認めます。  
この方々も当山の檀家ではありませんが、こちらの  
過去帳には載っておりません。恐らく御地へ法直川  
村の方と思えます。

不取敢要用のみ 責酬迄 草々

三月十六日

願成寺

龍 淵 堅 道

(一休 石 宛)

○供養塔のある現場 (牛頭余白うみに追加)

この供養塔のある所は、国道十号線を南  
に進み、肘切社の前から鉄道の乗り越え  
で、その下った先竹の下部落に通  
る踏切小道を右に入ると、山裾  
によく形の整った庚申塔がある。  
その前を通過して、ここまで下って  
いる尾根の小径を少しの降り、左  
手久留須川に向いた斜面を30m程  
と進んだ小暗い林の中に、この供  
養塔がある。三三三はなれた横に  
庚申塔があるところから、河岸に  
道のなかつた昔は、ここが通路で  
はなかつたか。

密林の中であるので写真ほとんど  
ないが、擬灰岩で文字の目もよ  
いが、暗いのでかなり読みとりにく  
い。  
鉄道の寸ぐとであるが、道路から  
北、汽車の窓からも、全く見えな  
い。

